
共同研究の概要と経過

青木隆浩

1. 目的

地域開発と文化の保存は、従来相反することであった。経験的にも、地域開発は文化を大きく変容させ、反対に文化は開発の遅れた地域ほど古くからのものが残存すると考えられてきた。ところが、ホブズボウムらが「創られた伝統」という概念を用いて、一般に古いと考えられているものが案外新しく創られたものであることに注意を促し、さらに彼らの批判が皮肉にもその議論の前提となっていた本質主義の限界を顕在化させたことにより、両者の関係はますます曖昧に捉えられるようになってきている。実際にも、地域開発をきっかけとした文化の保存、反対に文化を保存するための地域開発が、とくに経済難の深刻な周辺地域でおこなわれている。

前者はまず、ダムや空港の建設を典型とした大規模開発において、強制的に消滅を迫られる地域独自の文化をどのような手段で残すかという問題と関わる。これについては、単なる記録保存を目的とするものから、新たな観光資源の創出に至るまで、様々なパターンが存在する。例えば、ダム開発は地域外からの労働者と金銭の流入を招き、地域社会を大きく変えてしまうため、水没する集落にとどまらず、しばしばその周辺地域にまで記録を残すきっかけとなる。このような場合に、国や都道府県を巻き込んだ大がかりな文化の保存活動が実施されやすい。一方、大規模開発から取り残された地域、あるいは開発事業が終わってしまった地域では、集落を維持するための数少ない選択肢の中から観光開発への道を選び、そのためにしばしば文化の利用と創造がおこなってきた。既存研究では、結果として生じた文化の保存と変化に注目することはあっても、それらを開発との関わりから検討する視点に乏しかった。そこで、本研究では文化の保存と利用、さらにはその過程で生じる変化について、開発との関わりからより包括的な調査・研究を試みる。

後者も前者と不可分の関係にあるが、より直接的には文化行政の変化と絡んでいる。もともと文化財は面的ではなく点的な対象のうち、特に貴重なものを現状保存することを目的としていた。ところが、点的な保存をしたところで、その周辺の開発が進んでしまえば、結果的に景観が阻害され、地域らしさを維持できないという事例が多発した。そこで、文化財保護行政は、より広い範囲での文化財指定を可能とするため、重要伝統的建造物群保存地区から文化的景観、またそれを保存するための景観法へと進んでいった。しかし、ここで経済的困難に直面しているが故に失われつつある景観を、文化行政の手法で如何に保存するかという点が大きな問題になった。基本的にこれは不可能なことであるが、現状ではファサードなどの工学的措置によって部分的に試行されている。さらには、河川や田園に対しても農業工学的な復元技術が開発されつつある。これらの実態から、文化

行政は現状保存から開発による保存へと大きく転換したとあってよい。だが、工学的な景観保全は地域の生産や生活の機能を経済的に解決できず、したがって気休め程度の対策にしかならない。既存研究では、このような文化財行政に対して批判を続けてきたが、それでも文化財保護の対象が拡大されつつある背景やその結果として起きている文化ないし生活の変化については、検討が不十分である。そこで、本研究会では、文化の保存を目的とした開発が行われる地域的な背景と、その結果として生じつつある文化ないし生活の変化について現状把握することを第2の目的とする。

2. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

- 浅川泰宏 埼玉県立大学・保健医療福祉学部・専任講師
金行信輔 千葉大学・工学部・准教授
川村清志 札幌大学・文化学部・教授
高橋晋一 徳島大学・総合科学部・教授
野本正博 アイヌ民族博物館・学芸課長
宮地英敏 九州大学附属図書館付設記録資料館・准教授
山本理佳 青山学院女子短期大学・非常勤講師
◎青木隆浩 本館研究部・准教授
岩淵令治 本館研究部・准教授
○内田順子 本館研究部・准教授
小池淳一 本館研究部・教授
重信幸彦 本館研究部・客員教授
柴崎茂光 本館研究部・准教授
葉山 茂 本館研究部・機関研究員
松尾恒一 本館研究部・教授
丸山泰明 本館研究部・特任助教
山田慎也 本館研究部・准教授

〔リサーチ・アシスタント〕

城石梨奈 お茶の水女子大学・大学院生

〔ゲストスピーカー〕

- 久万田晋 沖縄県立芸術大学附属研究所・教授
長廣利崇 和歌山大学・経済学部・准教授
西村 明 鹿児島大学・法文学部・准教授

〔講演者〕

- 澤井真代 法政大学・沖縄文化研究所・国内研究員
清水憲一 九州国際大学・経済学部・教授
-

平澤隆二 阿寒アイヌ工芸協同組合・職員

*所属は平成24年3月31日現在

3. 研究経過

〔平成21年度〕

- ◇第1回研究会 平成21年6月21日(日) 国立歴史民俗博物館
青木隆浩「趣旨説明」
内田順子「第4展示室リニューアル：Aゾーンとの関連について」
青木隆浩「北九州近代化遺産調査報告」
- ◇第2回研究会 平成21年9月21日(月・祝) 国立歴史民俗博物館
柴崎茂光「地域開発における文化の保存と利用 ―白神山地の事例―」
青木隆浩「五箇山・白川郷の調査報告」
- ◇第3回研究会 平成21年12月19日(土)・20日(日) 国立歴史民俗博物館
松尾恒一「西表島 祖内／干立の節祭 伝統と現在」
久万田晋「戦後沖縄における民族芸能エイサーの発展」
川村清志「民謡の生成と競合 ―富山県五箇山地方『こきりこ』を中心に」
- ◇第4回研究会 平成22年2月19日(金)～22日(月) 徳島大学, 四国八十八ヶ所霊場, マイントピア別子
高橋晋一「徳島阿波踊りほか研究紹介」
浅川泰宏「四国遍路の巡礼路再生運動」
四国遍路(徳島・高知・愛媛の一部)調査
マイントピア別子(別子銅山跡)見学

〔平成22年度〕

- ◇第5回研究会 平成22年6月12日(土)・13日(日) 国立歴史民俗博物館
西村 明「長崎原爆の慰霊について」
山本理佳「大和ミュージアム設立を契機とする広島における観光空間の変容 ―被爆都市広島と軍事都市呉―」
丸山泰明「聖地・靖国神社の戦後史」
 - ◇第6回研究会 平成22年8月21日(土)～24日(火) いのちのたび博物館(北九州市)ほか
清水憲一「北九州の近代化産業遺産をめぐる現状と課題」
いのちのたび博物館見学
新日本製鐵株式会社八幡製鐵所(現・新日鐵住金株式会社八幡製鐵所)見学
直方市石炭記念館見学
田川市石炭・歴史博物館見学
宮若市石炭記念館見学
端島炭鉱跡(軍艦島)見学
-

直方市・田川市・飯塚市・宮若市内炭坑跡・炭住跡調査

◇第7回研究会 平成22年12月22日(水)～24日(金) アイヌ民族博物館, 阿寒湖アイヌシアターイコロほか

野本正博「白老のアイヌ観光と博物館」

平澤隆二「阿寒湖畔におけるアイヌ観光の実践活動」

アイヌ民族博物館見学

丹頂の里見学

阿寒湖畔エコミュージアムセンター見学

阿寒湖アイヌシアターイコロでアイヌ古式舞踊見学

◇第8回研究会 平成23年2月26日(土)・27日(日) 国立歴史民俗博物館

松尾恒一「夏季の都市祭礼と熱狂, 伝承と現在 — 能登半島宇出津『あばれ祭り』を考える —」

川村清志「ポストモダンの民俗芸能 — 『YOSAKOIソーラン』と『じゃんといむぎや』 —」

澤井真代「地域開発と儀礼文化実践の交錯点 — 八重山諸島石垣島川平の事例 —」

〔平成23年度〕

◇第9回研究会 平成23年6月18日(土)・19日(日) 北海道開拓記念館, 新さっぽろアーキスティホテルほか

柴崎茂光「鹿児島県屋久島における地域開発の歴史」

青木隆浩「第4展示室リニューアル『近代化を支えた産業の現在』の展示構成について」

北海道開拓記念館見学

美唄市郷土資料館見学

三笠市立博物館見学

夕張市石炭博物館・炭鉱の生活館見学

美唄市・三笠市・夕張市内炭坑跡調査

◇第10回研究会 平成23年9月23日(金・祝)・24日(土) 国立歴史民俗博物館

長廣利崇「大正・昭和戦前期の炭鉱労働世界」

山本理佳「近代産業遺産と文化遺産制度」

浅川泰宏「四国遍路の文化的価値」

川村清志「近代に生まれた『民謡の里』」

◇第11回研究会 平成24年2月18日(土)・19日(日) ことぶきホール(いわき市)ほか

内田順子「アイヌと沖縄展示について」

青木隆浩「五箇山・白川と産業展示について」

葉山 茂「気仙沼での生活資料救出活動と歴博展示に向けて」

みろく沢炭鉱資料館見学

いわき市石炭・化石館見学

スパリゾートハワイアンズ見学

常磐炭鉱内郷地区・湯本地区炭鉱跡調査

4. 研究成果

〔平成 21 年度〕

平成 21 年度の成果は大きく 3 つに分けられる。1 つ目は、観光開発と環境保全のせめぎあいに悩まされている世界遺産登録地域の研究、2 つ目は文化財の新たなカテゴリーとして注目されつつある近代化遺産と戦跡の研究、3 つ目が信仰・祭礼のイベント化・観光化に関する研究である。

まず、世界遺産登録地域の研究としては、白神山地、五箇山・白川郷、屋久島をおもな対象としているが、その中で平成 21 年度は白神山地の観光化や五箇山・白川郷における山村生活の変化と民謡の生成について把握することに力点を置いて研究した。白神山地では、観光化を推進している青森県側と環境保全を優先させている秋田県との間で、観光業の現状と森林資源の歴史的变化にどのような違いが出ているか確認した。また、負の遺産をあえて保存し、観光資源化するのも近年の傾向であるが、その中でかつて過酷な労働環境が問題となっていた炭坑跡や多くの犠牲者を出した戦跡の保存・記憶化と観光業の関係についても調査をおこなった。それらの背景として、世界遺産の登録ないし登録推進運動やその他の文化財保護制度のあり方がどのように関係しているか検討した。信仰・祭礼のイベント化・観光化については、よさこいソーランと沖縄のエイサー、四国遍路、西表島の節祭りをおもな対象として議論を進めた。信仰や祭礼は本来の意味を変化させて、あるものは新たな観光資源となり、別のものは伝統的な様式を保持しながら新しい観光形態に取り込まれている。それらの現状と歴史的变化、経済活動との関係などについて検討した。

〔平成 22 年度〕

まず、戦跡については、第 5 回研究会で長崎市が広島市の動向を意識しながら、施設整備やイベント等を実施していることが確認できた。一方で、両者は戦跡に対する意識が異なっており、そのことが観光業のあり方や平和学習への取り組み方などに影響を与えていた。

近代化遺産をテーマとした第 6 回研究会では、「九州・山口の近代化産業遺産群」の世界遺産登録推進運動における現状や諸課題について、実際の運動に関わっている清水憲一氏から話をうかがった後、各地の炭鉱資料館や炭坑跡、炭住、新日本製鐵株式会社八幡製鐵所（現・新日鐵住金株式会社八幡製鐵所）、端島炭鉱跡（軍艦島）などの現地調査をおこない、共同研究員の間で今後の課題を共有化した。

また、同じく世界遺産登録推進運動を展開している四国遍路や五島列島についても、比較検討のために調査をおこなった。その結果、同じ遺産をテーマにしても、対象地域が広域であるがために、観光化の進展に地域内での温度差があることを確認した。

アイヌ民族に関しては、二大観光地である白老と阿寒を対象にして議論をおこなった。白老については、ごく少数のアイヌが観光化に携わり、民族イメージを形成したことが確認された。一方、阿寒については、伝統的な儀礼や工芸を継承していく上での課題が検討された。

芸能・祭礼をテーマとした第 8 回研究会では、宇出津のあばれ祭りを事例とした祭礼の暴力性と、札幌のよさこいソーランや富山県城端のじゃんとこいむぎやを事例としたいくつかの類似するイベントの地域的な広がりについて、それぞれの映像を使っでの成果報告が得られた。また、石垣島川

平地区は八重山諸島有数の観光地であるが、その開発下において伝統的な儀礼が続けられつつも少しずつ変化していることが確認された。

その他、戦跡や炭坑跡、八幡製鐵所などに関して、写真や絵葉書、ガイドブック、調査報告書等の資料を収集し、生活や景観の変化、観光資源化について分析をおこなった。

〔平成 23 年度〕

平成 23 年度は研究会の最終年であるため、研究成果を公開する手段のひとつとしていた総合展示の新構築に向けて、具体的な検討を進めていった。

まず、第 9 回研究会では屋久島と九州北部の炭鉱、八幡製鐵所の展示構成案について検討するとともに、本研究会がおもな対象としてきたアイヌと炭鉱を大きく取り上げている北海道開拓記念館の展示を見学した。また、展示をおこなう上で、九州北部の炭鉱を他の主要な産地との比較によって位置づける必要性が認められたため、北海道における炭鉱跡と炭鉱展示の現状を調査した。

続く第 10 回研究会は、12 月 3 日(土)開催の第 80 回歴博フォーラムに向けて、講演者の報告内容を突き合わせ、議論の中心テーマを確認しあう作業をおこなった。予定が合わず、研究会に出席できなかった講演者については、後日個別に検討課題を確認した。

第 11 回研究会は、研究成果を第 4 展示室新構築とそれに付随する特集展示によりよく反映させるための展示構成案を検討する場とした。東日本大震災の被災地である気仙沼での生活資料救出活動は、当初研究目的に入っていなかったが、開発に伴う文化変容の問題としてこれまでの研究活動と密接な関係をもつと判断したため、その実践の結果と展示への反映方法について議論をおこなった。

そして、12 月 3 日(土)には、研究成果の中間報告と翌年 3 月 19 日(火)に開室される新たな第 4 展示室の予告編を兼ね、当館講堂で第 80 回歴博フォーラム「地域開発と文化資源」を開催した。内容は、第 4 展示室の「観光とおみやげ」と「開発と景観」に関わる部分である。この時の講演録は、青木隆浩・国立歴史民俗博物館編『地域開発と文化資源』(岩田書院、2013 年)として刊行された。

他に、世界遺産については、かつて林業で栄えた屋久島の集落跡を調査し、開発前後の景観変化を考察した。また、白神山地では、マタギの狩猟採集活動の現場に連れて行っていただき、生業の場としての自然と観光化されたその違いを体験した。五箇山・白川郷に対しては、近代から人類学や建築史学といった学問によって注目されたことを踏まえ、学説史とその背景を追うとともに、産業変化やダム開発、国道改良事業などがこの地域一帯を変貌させていった様子を集落ごとに調査する手法をとった。そして、五箇山・白川郷は秘境といわれながら、開発がらみの資料が少なからず発見され、その影響が合掌造り集落の存廃や観光化に大きな影響を与えていることがあらためて確認された。

炭鉱業については、衰退時の企業行動や行政による再開の動機が、景観や生活の変化に大きな影響を与えている。そこで、本研究会では資料が数多く残っている貝島炭鉱をおもな研究対象として、炭鉱があったころの生活を写真や文字資料、聞き取り調査などによって復元しつつ、現在との比較をおこなっている。また、貝島炭鉱の跡は現場にあまり残っておらず、観光資源化があまり進んでいないが、観光化による産業転換を進めている旧産炭地域が少なくないため、その違いが生じ

た歴史的な背景を比較考察した。

西表島も近代以降に炭鉱業や林業、稲作などによって大開発が進められた地域である。植生の急速な回復によってその跡は不明瞭になりつつあるが、今年度は仲良川流域とクイラ川流域、船浮集落を中心として過去の開発跡を調査した。皮肉なことに、かつては身近に存在したイリオモテヤマネコが、植生の回復とともにみられなくなったという話を聞くこともできた。また、沖縄本島と合わせて、自然保護と観光化に関する資料の整理と分析を進めた。

アイヌ民族に関しては、近代の北海道開拓と戦後のダム開発による影響が大きいとみて、その前後における自然資源へのアクセスについて調査をおこなった。また、自然資源への制約下で、アイヌ自身がどのように文化を伝承しているのか、その実践活動を調査した。

また、戦跡や国立公園の観光資源化、四国遍路の観光化と世界遺産登録推進運動、日光の社寺参拝、八幡製鐵所の変遷などについて、写真や絵葉書、ガイドブック、調査報告書等の資料を収集し、生活や景観の変化について分析をおこなった。

(3年間を通じて)

本研究は、基幹研究「民俗表象の形成に関する総合的研究」の1ブランチとして、第4展示室の大テーマ「『民俗』へのまなざし」のうち、おもに無形の文化に関する基礎的な研究をなすためのものである。そしてここでは、地域のあらゆる文化や景観、人々の生活を劇的に変える共通の要因としての「開発」に注目し、それと自然や信仰、芸能、産業、観光などとの関係を探ろうとした。

その対象として、本研究がまず取り上げたのが世界遺産登録地域である。具体的には世界自然遺産の白神山地と屋久島、世界文化遺産の五箇山・白川郷を研究対象地域とした。世界遺産といえ、一般に古くからの建造物や景観を保存することで、観光化を促進する役割をもつと考えられているが、実際にはその対象が前者から後者、つまり点としての文化財から面としてのそれへと移行する中で、徐々に近代化の影響を強く受けたものへと変化してきている。これは登録地域に現在の生活空間を含めているために必然的ではあるが、それ以上に注意しなければならないのは、その背景にしばしば開発に伴う急激な発展とその後の過疎化があるということである。

具体的にその開発の内容をあげると、ダム開発と森林伐採、鉱山開発が主だったものとなる。実際にも、白神山地では世界自然遺産に登録される前、その周辺地域で太良鉱山や尾太鉱山、西目屋ダム、素波里ダム、弘西林道と春秋林道の建設に伴う森林伐採など、大規模な開発が繰り返されている。五箇山・白川郷でも登録地域の周辺は林業、平瀬鉱山、御母衣ダム、鳩谷ダム、椿原ダム、成出ダム、小原ダム、祖山ダムといった大規模開発の拠点であった。それらの開発が終わり、過疎化が急速に進む中で地域おこしの手段として浮上するか、あるいは大規模開発による環境悪化への反動としてあらわれてきたのが、対象を面的に広域化させた直後の世界遺産登録地域である。このため、世界遺産について研究するには、登録地域のみを目を向けるのではなく、周辺地域を開発前後の長期間にわたって歴史的に調査しなければならない。したがって、何度も現地へ足を運ぶ根気のいる作業が必要になったが、本研究はそこから現状を幅広く捉える点において大きな進展を果たせたと考えている。

また、世界遺産に登録されてはいないが、自然のイメージが強い北海道と西表島でも開発との

関わりから調査を進めていった。その中で、北海道は近代以降の開拓事業によって自然を積極的に改変させていった地域である。とくに、アイヌ民族は、それまで自由に利用していた自然資源を政治経済的に大幅に制限された点で注目される。彼らは、住宅の建材や儀式の材料、食材などを自然資源から得てきたが、北海道の開拓が進むにつれて土地の権利を失っていった。それは、土地に直接関係してきた儀礼や信仰などの伝統的な文化を保持することが難しくなっていったことにも関わっていた。さらに大規模なダムが建設されると、アイヌ民族にとって重要な場所が消滅していった。このように、北海道の大規模開発によってアイヌ文化は多大な影響を受けており、伝統的な自然との関わりを失いつつある。一方の西表島はかつて炭鉱、林業、稲作の開発が進められた地域であった。西表島の石炭産業は品質が低かったため、戦後アメリカの判断によって廃止されるが、それ以前は島の主要産物であり、いくつかの新興住宅街を形成していた。また、現在は植生が回復しているが、かつてはパルプの原料としてマングローブの森林が大量に伐採され、水田開発によってマラリアが流行したこともある。以上の歴史的経緯に対し、本研究は自然保護と観光化の進んだ現在と過去の比較をするために、数少ない文献と現地での聞き取り調査によって、開発前後の景観や生活の変化を復元しようと試みた。その結果、炭鉱や水田の開発が河川沿いに集中し、新興住宅地や出稼ぎが活発化した後、それらの衰退に伴って回復した自然を観光化している現状を把握することができた。

次に、本研究において重視したのが、開発と信仰・芸能の関わりである。開発は既存の文化を変化させる一方で、新たな文化を生み出す。つまり、開発による急速な人口流入が各地の文化を複合化させることや、連帯感を強めるために全く新しい文化を築き上げること、さらには観光化のためにイベントを地域の祭礼として立ち上げ、地域おこしに用いることなどがこれらに該当する。例えば、世界遺産で知られる五箇山のこきりこ唄や麦屋節などの民謡は、ダム開発による集落の盛衰から大きな影響を受けている。また、高知のよさこい祭りは商工会が地域おこしのために始めた芸能であるが、現在は全国各地のイベントとして用いられている。現在は世界遺産登録推進運動が進められている四国遍路も、ロープウェイの建設によるアクセスの簡便化やバスやタクシーを利用したツアーの普及などによって観光化が進んでいる。このような信仰・芸能の観光化は、現在の民俗学にとって重要な研究課題であり、第4展示室新構築へとつながっていった。本研究では、信仰や芸能における意味づけの変化とそれを背景とした観光化の進展に注目して現地調査をおこない、その成果をおもに第4展示室の「観光とおみやげ」というコーナーに反映させることができた。

本研究が3つ目に重点を置いたのは、新たに設定された文化財の社会的影響であった。とくに産業遺産と戦跡は都市再開発が進められる中で近代化遺産として保存されることになったため、その社会的影響を重点的に調査することにした。これらのうち、産業遺産のなかで最も劇的な変化を遂げたのは、石炭産業と製鉄業であろう。石炭産業は明治時代から九州と北海道を中心として日本のエネルギー需要を支えてきたが、昭和30年代のエネルギー革命によって急速に衰退した。このため、短期間のうちに生活や景観の劇的な変化をとげた産業の代表的な事例である。一方の製鉄業は現在も発展を続けているが、近代化を支えた八幡製鐵所の東田第一高炉の火が老朽化のために消え、銑鉄の拠点八幡から戸畑や君津に移っている。そして、跡地は公園やスペースワールドに転用され、景観の大きな変化を見せた。石炭産業や製鉄業が築いた企業城下町は、様々な地域から大

量の人々を受け入れて複合的な文化を形成し、かつ福利厚生を通じた独特の生活感を抱かせるに至った。文化行政においては各産業の近代化に果たした役割を強調することが多いが、本研究ではそれを歴史の一面的な切り取りと捉え、企業城下町ならではの地域社会の劇的な変化に注目して、現地調査を進めていった。一方の戦跡については、沖縄・広島・長崎を対象に戦争被害の語りや修学旅行者への平和学習に力点をおきつつ、近代化遺産や世界遺産登録の地域に対する影響についても調査した。結果として、沖縄は戦争・戦跡の表象化をあまりおこなっておらず、専ら語りに重点をおいた平和学習活動を続けていること、広島は原爆ドームの世界遺産登録後からそれに関する土産物が増大していること、また長崎は戦後すぐから戦争・戦跡の表象化を進めていったことなど、3地域の戦争・戦跡に対するとらえ方がそれぞれ異なっていることを確認できたのは大きな成果であった。

(国立歴史民俗博物館研究部)